

# パストツレラ症

(Pasteurellosis)

家伝法：家畜伝染病（家きんコレラ，出血性敗血症）

▽ 疫学 ▽ 病原体 ▽ 動物における本病の特徴 ▽ 人における本病の特徴

## 概要

パストツレラ属菌（主に*Pasteurella multocida*）により，呼吸器感染，皮膚化膿等，多彩な症状を呈する感染症である。

## 疫学

わが国では，人において，1992年の23例から2001年の325例と10年間で10倍に増加（1997～2001年の年平均増加率は約40%と著増）を示した。感染の内訳は次の3つに大別できる。1) 呼吸器系の感染：40.9%，2) 動物の咬・掻傷による創傷感染：39.5%，3) その他（膀胱炎，敗血症，髄膜炎，外耳炎，副鼻腔炎，結膜炎等）：19.6%。

## 感染経路

保菌動物の口腔，腸管のパストツレラ属菌→キス，咬・掻傷等→経口感染，経気道感染，経皮感染。

## 保菌動物

哺乳動物，鳥類の口腔内，腸管内の常在菌。口腔内に犬で12～55%，猫で60～90%，猫の20～25%が爪に保有している。

## 病原体

パストツレラ属菌は， $1.4\pm 0.4\times 0.4\pm 0.1\ \mu\text{m}$ の陰性短桿菌で，10数種ほどが知られている。（*Haemophilus influenzae*と血液寒天上のコロニー，グラム染色所見ともに判別がほとんどできない）。*Pasteurella multocida*が主であり，他に*P.canis*，*P.stomatis*，*P.haemolytica*，*P.gallinarum*がある。

## 動物における本病の特徴

## 症状

犬，猫では一般に無症状である。まれに犬では肺炎，猫では肺炎，皮膚膿瘍形成が診られる。ウサギではスナッフ（上気道から肺炎症状），ラットでは気管支肺炎。マウスでは敗血症。豚では鼻まがり症，肺炎等が見られ，急性では死亡する場合もある。牛，馬では出血性敗血症，肺炎，乳房炎，髄膜脳炎。家きんでは沈鬱，発熱，羽毛逆立，下痢，チアノーゼ，呼吸器症状を呈する。

## 潜伏期

不明。

## 診断と治療

病原体確認：グラム染色→顕微鏡観察，培養は依頼すると良い〔検査依頼時に『パストツレラを疑う！（または検査の目的を書く）』と明記する。また，検体を採取した綿棒を保存培地に入れた場合は室温保存する（禁：冷蔵保存）〕。治療には，ペニシリン系，セファロスポリン系などが用いられる。牛，豚の肺炎，ウサギ（ペニシリン・アレルギー）のスナッフは治療困難。

## 検査法と材料

治療前の膿，血液等の材料を，検査センターの指示通りに保管送付を行う。培養検査が一般的である。通常は室温保存である。

## 類症鑑別

猫ひっかき病.

## 検査施設

北里研究所コンパニオンアニマルラボラトリー (KICAL) TEL : 048-593-3953.

## 予防

猫の爪を短く切る. 動物の健康を保持する.

## 法律

家畜伝染病予防法では *P. multocida* に感染した家きんの70%以上が死亡した場合のみ監視伝染病 (家畜伝染病) の「家きんコレラ」として取り扱われる. 対象動物は鶏, あひる, うずら, 七面鳥. また, 家畜伝染病の「出血性敗血症」の対象動物は牛, めん羊, 山羊, 豚, 水牛, 鹿, いのしし. 診断した獣医師は直ちに最寄りの [家畜保健衛生所へ届け出る](#). 出血性敗血症は日本には常在しない.

## 人における本病の特徴

人における本病は特徴的な症状が無い. 但し, 皮膚の感染においては, 動物の咬・搔傷後, 比較的短時間 (数時間~48時間以内) に急激に腫脹, 発赤, 疼痛が認められた場合, 本症を強く疑う.

**吸器系感染:** 軽い風邪様症状から重篤な肺炎まで様々. 基礎疾患 (気管拡張症, 陳旧性結核等) のある患者が多い.

**咬・搔傷感染:** 四肢, 頭部, 顔面に多く, 通常は受傷30分~1, 2日後に, 局所の激しい疼痛, 発赤, 腫脹で発症し蜂窩炎となる. 局所の化膿は20~40%に, 38℃程度の発熱が約20%に認められる. 局所の炎症が軽度の場合, 付属リンパ節の腫脹があっても, 全身感染に進展することは極めて稀. 糖尿病, アルコール性肝障害のある患者で敗血症となることがある. 死亡例も存在する.

## 診断と治療

動物と同様.

## 類症鑑別

猫ひっかき病 (リンパ節の腫脹までの期間が異なる).

## 検査法と材料

動物と同様.

## 予防

- 1) 寝室に動物を入れない.
- 2) 動物とキスをしない.
- 3) 感染経路, 動物の生態を理解し行動する.
- 4) 基礎疾患のコントロールを十分に行う.

## 法律

特に規制されていない.

(荒島 康友)

## 参考となる情報（外部サイト）

- > 壁谷英則, 藤田雅弘, 森田幸雄ら: ペットのグリーンイグアナにおける *Salmonella Pasteurella* および *Staphylococcus* の保菌状況. 日獣会誌 61, 70~74 (2008)
- > 大橋久美子, 滝川久美子, 荒井ひろみ ら: *Pasteurella multocida* の分離状況と患者背景 -最近9年間の成績-. 日本臨床微生物学雑誌 Vol.26, No.2, 112-118 (2016)
- > 嶋田恵理子, 宮本 忠, 嶋谷晋吾: 犬猫における臨床材料からのグラム陰性菌の検出状況と薬剤感受性. 日獣会誌. 64, 879-884 (2011)
- > 福地貴彦, 森澤雄司: 猫ひっかき病からDIC・急性腎不全を合併した *Pasteurella multocida* 感染症の一例. 感染症学雑誌. 83: 557-560, (2009)
- > 宮本 忠, 嶋田恵理子, 木村 唯 ら: 犬と猫からの臨床分離菌におけるファロペナム耐性株. 動物臨床医学, 24(1), 27-31 (2015)

